

# 北陸発! 砂漠緑化プロジェクト in 中国

JICA北陸支部スタッフが、3月に北陸の団体が実施している活動現場（中国）を訪問。プロジェクトの進み具合を確認してきました。

多くの関係者との意見交換を通じて見えてきた活動現場の様子を報告してもらいます。

（報告者：梶市民参加協力調整員）



遊牧民との意見交換にて

以下は、NPO法人世界の砂漠を緑で包む会<sup>\*2</sup>（以下「包む会」）の活動現場についての報告です。同団体は中国内陸部で進行する砂漠化を防止するため、その原因の一つと言われている放牧を減らすことを目標に、遊牧民の現金収入の向上を目指した活動を展開しています。

3月14日、北京から銀川へ。そこから車で走ること約1時間。プロジェクトサイトのあるアラシャン左旗に到着しました。約17万人が暮らしているこの地域に隣接するように、大きなゴビ砂漠が広がっています。多くの関係者との意見交換の中で、砂漠化の面積の拡大による砂嵐が、この地域に暮らす人々の生活を苦しめていることを再確認しました。

遊牧民自身は「できれば以前のように遊牧を続けたいが、そのためには砂漠化の拡大を防ぎ、草原の回復を待つことが大事で、これが我々の生活を守ることでもある」と考え、納得した上で、放牧を控えて緑化事業に参加していました。

包む会は、地域の小学校への環境教育にも貢献しています。対象校からは、「身近に起きている環境問題を取り上げることで、生徒の環境保護に対する意識が高まるので、今後とも積極的に取り入れていきたい」との報告がありました。今年度から（植林）体験による知識の定着化を目指した環境教育プログラムが実施される予定となっています。そのことから彼らの環境教育に対する関心の高さと意気込みが伝わってきました。



すぐそこまで砂漠が迫っている



包む会の大沢さんと

私が訪問した2日間の間も、現場では日中両国の専門家を含む多くの関係者が、緑化に向けた活動を行っていました。これまで日本で培ってきた経験と技術を生かした活動の中に、中国側関係者との信頼関係の高さを垣間見ることが出来ました。まさに草の根技術協力のメリットがフルに生かされた事業だと思いました。

帰国前に立ち寄った北京は、砂嵐による影響のためか視界がとても悪くなっていました。砂漠化が進むアラシャン左旗から飛んで来る砂によるものなのかもしれません。



帰国前の北京の様子

今年度はプロジェクトの第2年次（全3年）となります。これまでの活動による成果が、今まで以上に、目に見えた形で表れてくることが期待されます。



砂漠に残る水流の跡...

※1 JICA 草の根技術協力プロジェクトは、日本のNGO、大学、地方自治体、および公益法人の団体がこれまで培ってきた経験や技術を活かして企画した途上国への協力活動を、JICAが支援し、共同で実施する事業です。

※2 草の根技術協力事業（パートナー型）『中国内モンゴル自治区アラシャン盟における包括的貧困遊牧民の生活支援と地域教育を通じた砂漠化防止事業』（2007/4～2010/3）

思いを伝えることから国際協力は始まります

## 国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト2008

作品募集

JICAでは、全国の中学生・高校生の皆さんから国際協力に関するエッセイを募集しています。本やテレビ、青年海外協力隊体験談などを通して開発途上国や国際協力について感じたこと、考えたことを周りの人々に伝えてみませんか？



昨年度表彰式の様子。15名が個人賞を、11校が学校賞を受賞されました。

今年度  
応募要項

**テーマ 地球と生きる ～地球に暮らす一員としてできること、考えること～**  
（題は自由です）

●募集期間／平成20年6月12日(木)～9月10日(水)

●募集内容／開発途上国や国際協力について考えていることを400字詰原稿用紙で中学生3枚以内、高校生4枚以内

### 昨年度北陸から生まれた作品

#### ●高校生の部審査員特別賞受賞・後藤宏美さんの作品より

自分が過去とつながったところに生きていることを初めて実感した。情報としてしか知らなかった問題が、急に色付いて見える様にもなった。私はこれから、情報に対し受身ではなく行動を取れるようになると思う、その行動の一つとして、この文章を書くことができて本当に良かった。

#### ●中学生の部入賞受賞・本吉万希子さんの作品より

「自分には何もできることがない」そんな考えを持ってはいけない。（中略）ただ世界中の人々、一人一人が誰かのことを思い、命を無駄にせず、一生懸命に生きていくだけでもきっと何かが変わり、多くの人々が救われる。私はそう信じている。

### 毎年このように 参加しています

毎年ご応募下さる石川県二水高等学校の島村先生に、取り組みの様子を伺いました。

本校では、1年生を対象にした「世界を考えるワークショップ」という行事を行っています。「異文化の中でプロとして働くというのはどういうことか」を切り口に、日本語教師や農業指導者、栄養士など、様々な職種の元青年海外協力隊員の皆さんに来ていただき、生徒は自分の希望する方のお話を聞きます。その後、講演の感想を元にエッセイを作成し、各クラスで輪読しています。生徒一人は一つの講座しか聞けないのですが、朗読会を通して他の講座の内容に触れることができます。

●詳しくは [JICA 北陸ホームページ](#) → [開発教育](#) → [エッセイコンテスト](#)

## 海外ボランティア from 北陸

### アフリカ、ニジェールの子供たちの熱意に込めて



#### 金津 信一さん(ニジェール/理数科教師)

私は今、西アフリカのニジェールで理数科教師として活動しています。ニジェールは、世界で最も暑い国の一つで、面積は日本の約3倍です。しかし国土の3分の2が砂漠で覆われています。世界最貧国の一つに位置づけられており\*、国民の生活は貧しく、1日1ドル以下の生活をしている人がほとんどです。



金津さん（右端）

ニジェールの学校では、教室の机・イスは壊れているものがほとんどです。また、教室には電気がないため、授業は暗い環境で行なわれ、時期によっては砂嵐がしばしば起こるため、教室の窓は閉め切って授業が行なわれています。理科実験室も同様に良い状態とは言えません。しかし、学校の予算は極めて少ない状況のため、状況はあまり改善しません。生徒は過酷な環境にも関わらず、真剣に授業を受けています。生徒は教科書を与えられていないので、先生の言うことが生徒にとっての教科書になります。そのため生徒は授業中、真剣に先生の話聞いています。先生の言葉を一言一句も逃すまいとノートを真剣に取る生徒たちの授業姿勢にとっても感じています。その光景を見て、今より少しでも生徒達に良い環境で、わかりやすい授業を受けさせてあげたいとも感じています。



熱心に学ぶニジェールの生徒たち

※[HDP]人間開発指数(Human Development Index)では、174位(177位中)である。2007年11月現在